

3-3 災害体験談のヒアリング調査

(1) ヒアリング調査の概要・結果

今回、過去の災害体験者の生の声を収集し、今後、流域内で伝承していくべき災害教訓を抽出するため、ヒアリング調査を行った。また、ヒアリング調査とあわせて資料収集や現地調査も行った。以下に、ヒアリング結果の概要と実施結果を記載した。なお、ヒアリング対象者の一覧とヒアリング概要は参考資料-4に整理した。

表 6 ヒアリング調査の概要

目的	<ul style="list-style-type: none"> ・災害体験者の生の声を収集し、失われつつある当時の状況を保存 ・今後、流域内で伝承していくべき災害教訓を抽出
実施時期	平成 19 年 12 月末～平成 20 年 1 月末
対象者数	<p>48 組（延べ 61 名）（地区別内訳は次項の図、ヒアリング対象者属性等の詳細は参考資料-4 を参照）</p> <p>※上記（48 組）のほか、街頭インタビュー（5 名）も実施した。</p>
ヒアリング項目	<p>以下項目に従いヒアリングを実施した。</p> <p><u>1. 昭和 36 年、58 年、平成 18 年 7 月災害などの被災当時の状況・心情について</u></p> <p>①雨が降り始めたときのまわりの状況 / ②雨が降りはじめた時のあなたやまわりの人たちの行動 / ③雨の勢いの変化 /</p> <p>④川の水位が上がってきたとき、災害に直面したときのあなたやまわりの人たちの行動 / ⑤避難の有無とその時のあなたやまわりの人たちの状況</p> <p><u>2. 教訓伝承について</u></p> <p>①被災前後で、あなたやまわりの方々の日常生活や生活習慣で変化したこと。また、大雨や災害に対する考え方や行動の変化について。</p> <p>②平成 18 年 7 月の災害時、過去の災害での経験や教訓で活かされたこと。</p> <p>③活かされた教訓を学んだきっかけ。また、覚えていた理由。</p> <p><u>3. 地域に語り継がれている災害に関する話について</u></p> <p>・住んでいる地域で昔から語り継がれている災害に関連する話について。（大雨、洪水、土砂災害、地震など）。また、役に立った話について。</p> <p><u>4. その他</u></p> <p>・これまでに災害を経験して、次世代に向けてこれだけは言っておきたい、伝えておきたいこと。（小さい子どもたちに対して特に言いたいこと。）</p> <p>・その他、将来に備え、行っていること、感じていることなど。</p>

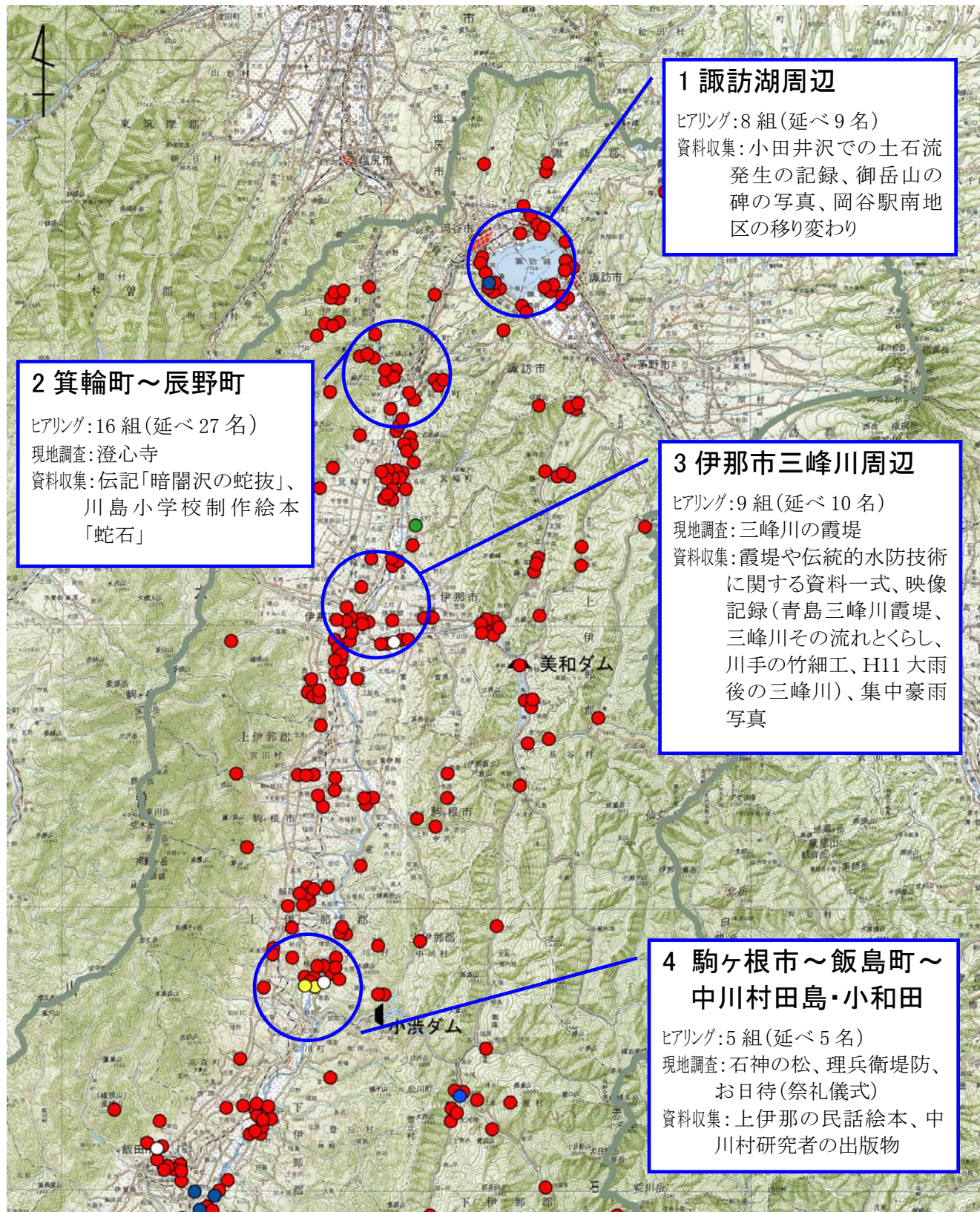


図 46 現地詳細調査地域の位置(諏訪～上伊那)

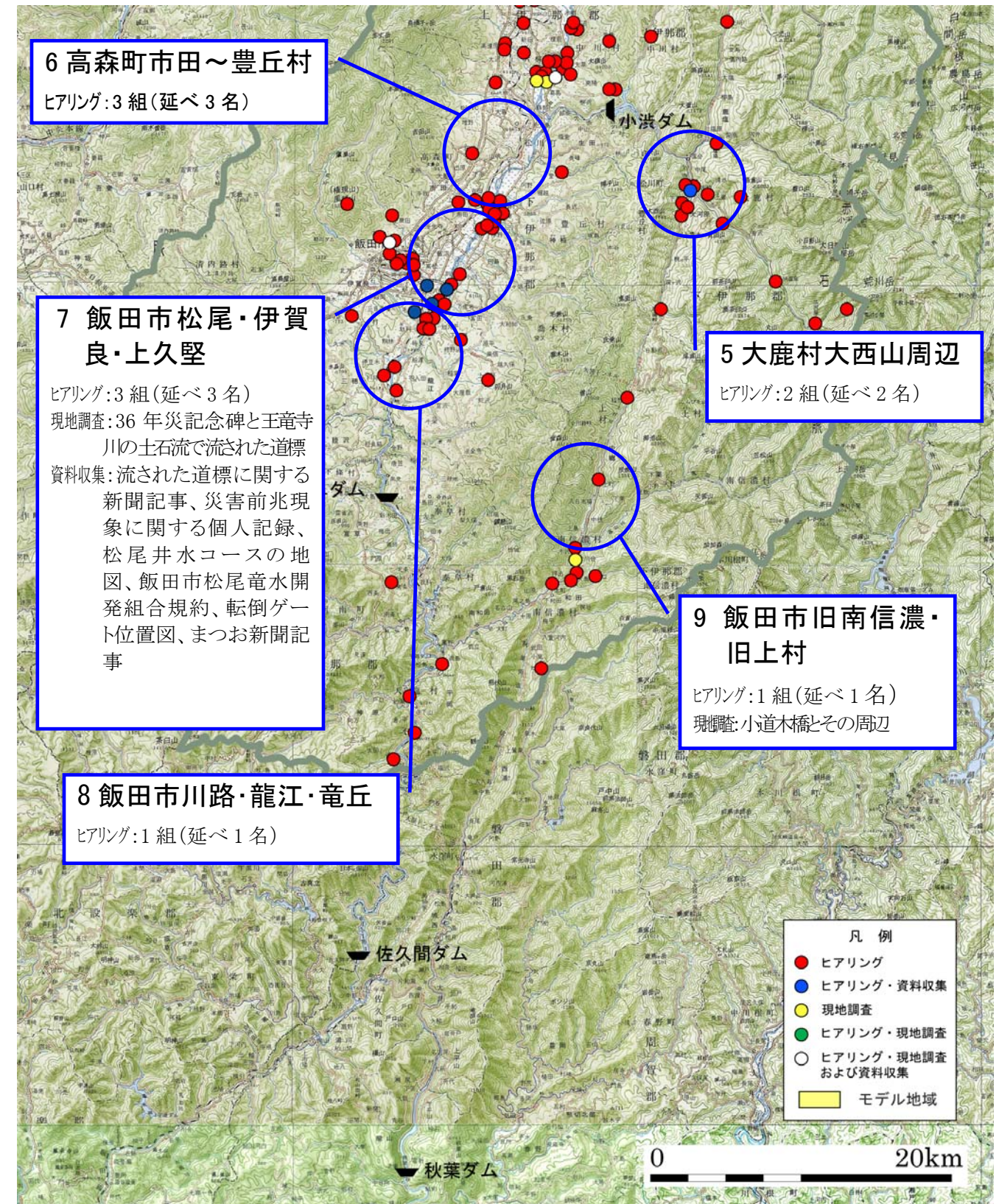


図 47 現地詳細調査地域の位置(下伊那～以南)

災害体験者より、災害当時の状況をヒアリングした内容を抜粋すると以下ようになる。
また、今回のヒアリング調査では災害体験者の体験談の映像を収録し、その中から話を
いただいた内容を6種類のテーマに分類し、それぞれのテーマに沿ったDVDを作成した。

体験談その1 (Hさん／飯田市／36 災)

方々の土手が崩れてきて、低い橋に流れてきた材木や小屋が詰まって次第に水が溢れてだんだんと大きな災害になった。その時の勤め先近くの松川の堤防が崩れるということで従業員が集められ、木や竹を切ってきて土手が流れないように半日ぐらい止めていた。その後家に帰ったら大変なことになっていた。職場から家へ向う途中、井水が方々で氾濫し始めていたので急いで家に戻った。目の前で自分の田植えをしたばかりの田んぼが流されてしまい、田んぼを守るために腰丈まである濁流の中に飛び込んだ。目の前で流されていく田んぼを見て涙がでてきた。

雨が止みかけて家の方の災害も大分収まったので今宮やげんちょう川を見に行き行って惨状を見てびっくりした。自然災害の恐ろしさに勝てないと感じた。行政の面で力を入れて守っていかねばならないことと感じた。

市町村単位では対応できないぐらいの大災害であったが、国をあげて復興してくれた。「権現山(虚空蔵山)にひびがはいったから気をつけろ」ということもあり、10日間ぐらいは逃げ惑っていた。自衛隊がきてくれたので安心したりが、「会社は大丈夫か」ということを気にしていたので先のことは考えられなかった。

体験談その2 (Nさん／飯田市／36 災)

堤防の上から手が洗えるぐらいのところまで水位が上がっていた。その時天竜川上流河川事務所にて、太田切川を流れる石の音を聞いて「いやいやすごいなあ」と思った。

28日朝方の雨で「こりゃあぶないぞ」と職場の中でも話が持ち上がっていた、それから破堤の情報や交通遮断の情報が電話で入ってくるようになった。事務所全体では災害復旧ができないということで、他の地建から派遣してもらい対応した。

小渋川と青木川の氾濫原のど真ん中に建てられていた小渋川砂防事務所が大西山の崩壊に巻き込まれ5名の職員が犠牲となった。当初右岸側の斜面が地すべりで落ちてくるということで注意していたが、2人の職員が小渋川の水がおかしいということで大西山に向かって見に行った時に山が崩れ行方不明になり、建物もつぶれてしまった。全体では44名の方が一瞬のうちに犠牲となった。

7月に実施した痕跡調査で川路に行った時、人々が打ちひしがれてしょんぼりしていた。周囲は洪水で埋もれたものが腐って異臭をはなっていた。

災害は人々に途端の痛みを与える、災害というのはこんなにひどいものかということを実感した。

体験談その3 (Oさん／岡谷市／H18 災)

今までにない降り方だった。土砂災害が起こって対応のために沢に行こうとしたが下は水浸しで行けなかった。住民が湊小学校に避難することになったので準備を指示した。軽トラで水の中を走り、寺に行って下を見た。二名の行方不明者が出ていて、えらいことになったと思った。対応のために湊小学校に行こうとして消防団に止められた。家の塀伝いに歩いて行って土砂にはまり、滑って土砂の中に転んで、戻ってまた同じ目にあった。なんとか小学校にたどり着いた。何とかしなければという気持ちだけだった。

上から下に逃げた人が犠牲になり、横に逃げた人は助かった。先に逃げた人たちが声をかけていたおかげで助かった。避難所でもみんなずぶぬれだった。泣いている人もいたが、無事だった家で炊き出しをして持ってきてくれた。

避難所の人たちは家の周りの状況を知りたがったが、情報がなかったので、市に話をして毎夜情報を話した。避難所にしきりが必要だと思ったので、教室を空けてもらって、知り合い同士などで入ってもらうなどした。

結局 7 名の方が亡くなったが、近所の人のおかげですぐ身元がわかった。隣組を面倒くさがる人もいるが、お互いに声を掛け合うことが大事だと感じた。

体験談その4 (Iさん／伊那市／H18 災)

14 日、15 日ぐらいから雨が續いていて、平成 11 年の長雨の時のような感じに似ていた。17 日の朝降り始めた時に、「もうこれはおかしいな」と思い、警報が出る前に登庁した。

自分の住んでいる西春近の高台の辺りでは、傾斜地だけれど地質の関係である一定量の雨が降ると地面が耐え切れなくなって水が出てくる川があるが、普段はカラで水がないがある程度長雨が降ると水がでてくる、これに近いような状況だったので感覚であぶないなと分かった。

18 日夕方に災害対策本部を設置、西高速で土砂崩れ発生が発生した。釜口水門の放水量を見る中で浸水想定区域内の避難準備情報について災害対策本部の中で検討しだした。災害対策本部のホワイトボードに随時書き込まれる北殿の水位情報が危険水位を超えて何分後には計画高水位を超えそうだという状況もある中で、自主避難→避難勧告→避難指示発令と進めていった。空の様子を見て、何か災害が起きそうだという覚悟が決まった。

19 日、「前沢川があぶない」と通報があった。中央道が通行止めになり、下道で交通渋滞がおきて職員が現地へ行くのに時間がかかった。避難所へ避難した人たちは約 3,200 人程度だった。それ以外に近所や親戚の家に避難した人もいるので、約 10,000 人近い方が移動した。

かつて経験したことがない土石流が発生するとは想像がつかなかった。今から思うと「できれば担当は変りたいぐらい」な災害だった。

(2) ヒアリング調査より得られた災害教訓

ヒアリング調査を通じて得られた伝承すべき内容を、①個人における災害に対する認識や行動の様態・あり方、また②地域社会の災害に対する様態・あり方に着目して整理すると以下のようなになる。

① ヒアリング調査より得られた教訓

(個人における災害に対する認識・行動の様態・あり方)

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
災害時 行動	<ul style="list-style-type: none"> ・「南風だと三田切が出る、北風だと三峰川が出る」といわれていて、三田切から出た水は茶色く、三峰川から出た水は青っぽい(Mさん/中川村大草) ・白っぽい水なら三峰川の水が出ているということ。黒っぽい水なら西山の奥が荒れている。H18年災の時の洪水の色は真っ黒だった(Kさん/駒ヶ根市赤須町/H18年災) ・天竜川の中で岩がぶつかりあって火花が見え、音を聞いて恐かった(Hさん諏訪市上川) ・天竜川は洪水の時、青白く光って見える。H18年災のときも見えた(Mさん/中川村大草) 	天竜川の出水時に特徴的な川の色や様子により、 <u>災害の予兆や危険性を伺い知る</u> ことができる
	<ul style="list-style-type: none"> ・堤防が決壊しそうだ、という情報を受けて新潟の長岡水害の光景を思い出し、堤防が決壊すると一面水浸しになるのではないかと、という状況を想像した。(Hさん/箕輪町中箕輪/H18年災) ・地域を観察して、災害の予知能力を高めて欲しい。川の流量、色、音、臭いで注意できる能力を、学んで伝承して欲しい。予想したらどう対処するかを学ぶこと。(Nさん/下諏訪町社) 	出水状況などから <u>起こりうる災害の様態をイメージする能力を養う</u> ことが重要である
	<ul style="list-style-type: none"> ・増水に関しては、いつも中条橋を自分の基準にしている。ここでは、57年災と同じくらいの水量だった(Iさん/伊那市西高遠/H18年災) ・藤沢川と三峰川の合流点の弁才天橋にほこらがあり、「ここまで水が来ると危ない」という指標になっている。藤沢川と松倉川との合流点にもあると聞いている(Iさん/伊那市西高遠) 	過去の出水の状況や水位から、 <u>災害の予兆や危険性を伺い知る</u> ことができる
	<ul style="list-style-type: none"> ・堤防の後側から水が出てきたからおかしいと思ったら、堤防の下を濁流がえぐっていた。水が濁っているため川底が見えなかった(Kさん/伊那市美篤/36年災) ・へんなところから水がでてたら気をつける(Mさん/松本市島立) ・小さな沢では水が濁る、木が揺れるなど何らかの前兆がある(Mさん/伊那市長谷溝口) ・57年災等の教訓から人的被害がないように避難に関して<u>早めの対応を心がけた</u>(Iさん/伊那市高遠) 	異変に気づき <u>早め早めに判断・行動することが重要</u> である
	<ul style="list-style-type: none"> ・橋に木が引っかかって水が溢れていたのを、住民が決壊と間違えて通報してきた(Iさん/伊那市伊那部/H18年災) ・H18年災時、ダムアップしていた辰野町小横川の崩壊地の写真を撮りに行き、二次災害の犠牲となった(Yさん/辰野町中央/H18年災) 	災害時の異常現象に対する <u>認識が不十分であったための確な行動をとることができなかった</u>

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
	<ul style="list-style-type: none"> ・権現沢の山が動いて住民が避難した(I さん/伊那市西高遠/36年災) ・大西山が崩壊して、ここも危ないという恐怖感から避難の行動にでた(K さん/大鹿村大河原/36年災) ・市野瀬では皆自主的に高いところへ避難していた(N さん/伊那市長谷溝口/36年災) ・今のような広域避難所はなく、自分の判断で避難をしていた(N さん/飯田市松尾/36年災) 	<p><u>状況を察知して恐怖感を抱くことが適切な行動に結びつく</u></p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・山が鳴ったら山裾にいないで山へ登れ(T さん/伊那市伊那) ・上から下に逃げた人が犠牲になった。横に逃げた人は助かった。先に逃げた人たちが声をかけていって助かった(O さん/岡谷市湊/H18年災) ・おばが高森町にある勤め先の学校から大雨の中を帰る途中、鉄砲水がきてとっさの判断で家の陰に隠れて助かった(I さん/中川村片桐//36年災) 	<p><u>過去の土石流に対する避難行動を参考に状況を的確に判断できる能力を養うことが重要である</u></p>
災害時行動	<ul style="list-style-type: none"> ・おじいさんの葬儀直後でおばあさんが避難を拒んだため家族は家を守るため避難しなかった(K さん/伊那市美篁/36年災) ・当時 80 歳くらいだったおばあさんが「生まれ育った家だし、先祖様が守ってくれる」と言った。おばあさんが逃げないと言うので、家族全員家にいた(N さん/伊那市長谷溝口/58年災) 	<p><u>言い伝えや経験に基づく個人の信念などにより避難行動を阻害されることがある</u></p>
災害に対する日頃の認識	<ul style="list-style-type: none"> ・河川は整備されたが、地質のもろさは変わらない。川のそばは怖いと思う(K さん/飯田市山本) ・その地域の歴史を知ることが重要。霞堤のあるところは水害の常襲地帯などの認識を持つ(K さん/伊那市伊那部) ・その土地の歴史を知って、そこから何を読み取ればよいかを考えることは、地域に生きる上で大事なことだと思う。災害は起こりうるものだという前提で、日頃の備えをし、自分の体は自分で守る意識をもつことが必要だ(M さん/飯田市追手町) 	<p><u>地域の歴史や自然特性を知り、繰り返し災害が起こる土地であるという認識を日頃から持つことが重要である</u></p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・災害に対する体験や感覚は、山側と川べりでは違う(N さん/飯田市松尾) ・長谷に足を向けては寝られないはず、下流にすんでいる人は水に対する恐れを持っていない(N さん/伊那市長谷溝口) 	<p><u>住んでいる場所の違いが人々の災害に対する認識の違いを生み出している</u></p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・天竜川という大きな川があそこまで水がでるとは想像できなかった(H さん/諏訪市上川/36年災) ・災害とは縁がないところというイメージは持っていたので、まさか災害が起きるとは想定していなかった(H さん/諏訪市上川/H18年災) ・災害対策本部を設置した当初、土石流というよりは川の氾濫の方に重きをおいていた(Y さん/辰野町中央/H18年災) ・36年災時に床上浸水があった地区だが、堆積した土砂等により高くなっていたから大丈夫だと思っていた。58年災時は「まさか」と思っているうちに浸水した(H さん/飯田市松尾明) 	<p><u>災害時には常に想定外のことが起こりうることを予め認識することが重要である</u></p>

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
	<ul style="list-style-type: none"> ・「権現山の頭が見えているうちは雨は降らない」(Mさん/飯田市追手町) ・「天竜川の川音がよく聞こえると雨」(Mさん/飯田市追手町) ・「入笠山で大雨が降ると、山室川が溢れる」(Iさん/伊那市西高遠/36年災) 	<p>気象などに関することわざには災害を未然に防ぐ心構えに対するメッセージが込められている</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・「くら」「よけ」などの地名があるところは危険(Sさん/長野市南長野) ・川の字のつくところに家を建ててはいけない(Kさん/飯田市山本) ・崩壊がおきた志平川の上流には、「〇〇窪」という字名が残っている(Sさん/諏訪市上川) ・青島地区や狐島地区では「島」とつく地名が多く水害との歴史が語られている(Kさん/飯田市追手町) 	<p>災害と関係する地名の知識を得ることで自分が住む地域の危険性を伺い知ることができる</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・昔から伝わる話を話しても、子どもや若者は科学的に証明できないものに聞く耳を持たない(Mさん/中川村大草) ・今の若い人は知らないが、天竜川で水遊びをするとき、水際にケルンのような石積みを作っていた。その石積みが見えるうちは大丈夫で、見えなくなったら増水していると判断していた(Mさん/中川村大草) 	<p>子どもや若者に災害にまつわる言い伝えや教訓が浸透していない</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが天竜川に遊びに行く機会も減り天竜川は自分たちの生活から切り離された別の存在となってきている(Iさん/中川村片桐) 	<p>日常生活と川との距離が遠く、災害に対する意識が薄らいでいる</p>

② ヒアリング調査より得られた教訓
(地域社会の災害に対する様態・あり方)

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
災害時の対応	<ul style="list-style-type: none"> ・区長に避難指示の意向を予め伝えなかったため、後で怒られた。災対本部などには、地元リーダーの参加が不可欠だと痛感した(Iさん/伊那市西高遠/H18年災) ・57年災時、高遠三好地区の赤坂集落で副区長の判断で高いところに避難させた直後に土石流が発生した(Kさん/飯田市追手町/57年災) 	<p><u>住民の避難</u>においては<u>地域リーダーの参画が重要</u>である</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・昼夜問わず消防団員で堤防の警戒にあたった(Kさん/伊那市美篤/36年災) ・当時は行政の体制もなかったから、「向こう3軒両隣」という組合が役に立った(Hさん/飯田市松尾明/36年災) ・被害に遭われていない近隣の人たちや中高生達が、炊き出しや力仕事を進んで行ってくれた。(Sさん/岡谷市湊/H18年災) ・7名亡くなったが、近所の人のおかげですぐ身元がわかった。隣組を面倒くさがる人もいるが、お互いに声を掛け合うことが大事(Oさん/岡谷市湊/H18年災) ・市街地のアパートに住んでいる人や住民登録をしないで住んでいる人(移住者、外国人含む)は、自分の住んでいる地区名がわからない人がいた(Eさん/箕輪町中箕輪/H18年災) 	<p><u>地域の共助による災害への対応が重要</u>である一方で、近年コミュニティの弱体化が進行している</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・伊那市中心部の消防等各機関は、天竜川が増水中のため高遠方面に応援に来ることが不可能であった(Iさん/伊那市西高遠/H18年災) ・151号のパトロールをしてから徒歩で3、4時間かけて深沢阿南線を見に行った、道路が無くなりすごい惨状だった(Mさん/松本市島立/58年災) 	<p><u>不測の事態も想定して災害対応能力を向上</u>させることが重要である</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・迅速な対応をとるために災害現場での事務所としての判断は現場に出向いた経験の豊富な担当者に委ねた。現場での状況判断ができるコンサルタント技術者の力も借りながら迅速な対応ができた(Mさん/松本市島立/H18年災) ・急ごしらえで土石流センサーの代わりに水糸を借りて消防団員の見張りを立てた。行政もコンサルタントも現場の状況から即断即決できる技術力を身につけるべき(Sさん/長野市南長野) 	<p>災害時には災害現場で<u>即断即決する知識、技術力が必要</u>である</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・物資や大まかな情報に不足はなかったが、避難した人は何より現地の状況を知りたがっていた。信大の北澤先生や平松先生に避難所で現地の詳細状況を話していただいたことで住民は安心した(Sさん/長野市南長野/H18年災) ・避難指示が出て避難してから2時間くらいで、災害状況など情報が知りたいと住民から求められた。(Iさん/伊那市西高遠/H18年災) ・避難所となった体育館ではテレビなどの情報入手手段がなく、携帯を持っていないお年寄りや、携帯を持っていてもコンセントが不足し携帯を充電できず使えない人が多かった(Sさん/岡谷市湊/H18年災) 	<p><u>避難所で住民は詳細な現地情報を求めている</u></p>

	ヒアリング調査結果(体験談)	伝承すべき内容
	<ul style="list-style-type: none"> ・都会に行っている若い人たちから、役場ホームページ上での情報提供の要望やトラック運転手から、ラジオでの道路情報提供の要望があったなど、町外にいる人への情報提供の重要性を感じた(Tさん/下諏訪町西鷹野町/H18年災) 	<u>地域住民以外への情報提供も重要</u> である
平常時の備え	<ul style="list-style-type: none"> ・上流に美和ダム、高遠ダムがあるため安心していた(Kさん/伊那市美篤/36年災) ・ダムの整備が進み災害が減り、安心している(Yさん/伊那市美篤) ・砂防えん堤ができていたので安心できた。(Nさん/下諏訪町社/H11年災) ・美和ダムに材木が大量に流入したが、ダムがあつて良かったと思った(Iさん/伊那市西高遠/36年災) 	<u>ハード対策への依存だけでなく、自助や地域コミュニティにおける共助による災害への準備も重要</u> である
	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和34年頃から中川東小学校では、祖父母が子どもたちの教育に関わるよう「祖父母の会」が組織されていた。この組織が全面的に学校に協力し、災害時にも機能した(大雨・台風時の祖父母付き添いによる下校、パトロールなど)(Mさん/中川村片桐/36年災) ・北小河内地区の中で災害後、土日にボランティアを募集したら各家から一人ずつ以上のボランティアが出てきた。これは地域の日ごろからのつながり(お任せボランティア制度、お茶のみ会、帰宅児童の見守り活動など)がある故だと思ふ(Mさん/箕輪町東箕輪/H18年災) 	<u>平常時における地域でのコミュニティ活動が災害時に力を発揮する</u>
	<ul style="list-style-type: none"> ・いざというときに役立つ技術を学んでおく必要があると思う。昔の技術を知る最後の世代だと思うが、新しい技術教訓も伝えていかなければならない(Iさん/伊那市伊那部) ・不安に思うようなことは無かったが、ダムもできて、伝統的な水防技術がなくなりつつあった(Yさん/伊那市美篤/45年災) ・木流し工法の要請が来て、災害時に木を切り出していい場所を決めていたが、消防団の若者達で実際に木流し工法をするのは危険だということでやらずにトンパックで対応した(Hさん/箕輪町中箕輪/H18年災) 	<u>廃れつつある地域に残る水防技術を確実に継承していく必要がある</u>
	<ul style="list-style-type: none"> ・「広葉樹は切ってから10年ぐらいたつと根が腐り始めるので、そこに水がまわると流れやすい」と森林組合のおじさんから聞いた(Kさん/駒ヶ根市赤須町/58年災) ・単一樹種ではなく混合林を作り、根張りのよい木の山にしないと災害を防げない。ダムを作るのは重要だが、カラマツ林の手入れをしないために、災害時に流木となって被害を大きくしている。(Nさん/伊那市長谷溝口) ・ダムだけではなく山の保全も重要。手入れはボランティアがしているので、国の助成もあつて欲しい(Oさん/伊那市伊那部) 	<u>流域全体での災害に強い地域を構築するうえで、山林づくりや保全活動が重要</u> である